

# カルディナル・ニポーテの権力の諸相

—教皇庁におけるフランチェスコ・バルベリーニの政治、宮廷、文化活動を事例に  
(1623-1644) —

喜友名 朝輝

## 1. 序論

1621年から1623年までヴェネツィア共和国のローマ駐在大使を務めたレニエル・ゼーノは、任期の終わりに、教皇庁に関する報告書を執筆した。その中には、教皇の甥に関する次のような一節がみえる。当時の教皇ウルバヌス8世の「3人の甥のうちの長男は、枢機卿に就任してすでに10ヶ月が経つ。フランチェスコという名で呼ばれ、およそ26歳、とても美しい顔つきと非常に洗練された身のこなしで、まるで謙虚さの生ける肖像のようだ」<sup>1</sup>。続けてゼーノが言うには、フランチェスコは洗練された話し方を身につけており、どのような感情を持っていようとも、彼の意見をまるでそれが本心であるかのように人に伝えることができたという。また叔父をととても尊敬しており、知に貪欲な叔父の気質に合わせるために、フランチェスコはとても小さい頃から勉学にいそんでおり、哲学、神学、法学を修めた。教皇は今や、この甥に最も重い職務を任せており、その働きぶりに満足しているとのことであった<sup>2</sup>。

このように、教皇庁には16、17世紀を通して、枢機卿に叙任される教皇の甥が存在した。彼らは、叔父でもある教皇の補佐をするために、教皇の即位直後に登用され、カルディナル・ニポーテ (Cardinal Nipote) と呼ばれていた<sup>3</sup>。この言葉は制度上の官職名ではなく、公的史料に用いられているわけでもない。ただ彼らが教皇の甥 (イタリア語で甥をニポーテ *nipote* と呼び、この教皇庁の親族優先主義をネポティズムと呼ぶ) であったため、17世紀には既に慣習的にそのように呼ばれていた<sup>4</sup>。彼らは、教皇の発給する小勅書によって、教皇庁及び教会国家の統治に関わる権能を授けられており、その政治的地位の高さは宮廷の配置からもうかがえる<sup>5</sup>。

カルディナル・ニポーテは近世教皇庁の中枢に常に存在し、研究史上は、その実態をめぐって政治行政及びパトロン・クライアント関係の観点から議論が積み重ねられてきた。しかし本稿で

<sup>1</sup> “*Dei tre nipoti, il maggiore è quello già dieci mesi fu promosso al Cardinalato, chiamato per nome Francesco, d'età d'anni 26 in circa, di bellissimo aspetto et di gentilissimi costumi, sembra un vivo ritratto della modestia...*”. Niccolò Barozzi and Guglielmo Berchet (eds.), *Relazioni degli stati Europei lette al senato dagli ambasciatori veneti nel secolo decimosettimo*, Serie III, *Italia, Relazioni di Roma*, voll. I (Venezia: P. Naratovich, 1877), p. 152.

<sup>2</sup> *Ibid.*, p. 152.

<sup>3</sup> この役割は、16世紀を通じて徐々に慣習として形成された側面があるため、「最初の」カルディナル・ニポーテはそれほど自明ではなく、現在の学術的定義の問題を伴うことになる。それを踏まえた上で、カルディナル・ニポーテに関する古典的制度史研究が用いた時代区分 (1555-1691) を便宜的に採用するならば、この期間に活動した教皇の甥は概ね18人に上る。M. Laurain-Portemer, ‘*Absolutisme et nepotisme. La surintendance de l'État ecclésiastique*’, *Bibliothèque de l'école des charges*, vol. 131 (1973), pp. 487-568.

<sup>4</sup> カルディナル・ニポーテという言葉は、同時代の用法としては教皇の甥を指す様々な呼び方の1つに過ぎなかったように見受けられる。しかし現在では、宰相的存在としての甥を指す一般的な用語として用いられている。

<sup>5</sup> 例えばカルディナル・ニポーテの宮廷内の部屋は教皇の部屋と直接連結されており、彼の部屋には、様々な職務をこなすための専門委員会である聖省や、謁見に使うよう定められた部屋が多くそなえられていた。A. Menniti Ippolito, *Il governo dei papi: carriera, gerarchia, organizzazione curiale* (Roma: Viella, 2007), p. 122.

はより視座を広げ、役割の幅広さに焦点を当てることで、より現実に即したかたちでカルディナル・ニポーテの重要性を評価する。このために本稿では、ウルバヌス 8 世治世下（1623-1644）のカルディナル・ニポーテ、フランチェスコ・バルベリーニ（生没 1597-1679）に焦点を当て、純粋な官僚業務以外の活動にも考察を広げていくことになる。ただし本論に入る前に、近世教皇庁を取り巻く時代背景と、カルディナル・ニポーテの位置づけに触れておきたい。

近世教皇庁にとって 16 世紀は、ヨーロッパの政治諸勢力との関係性が大きく変わる時期であった。当時のヨーロッパ情勢に目を向ければ、ヨーロッパ各地のカトリック教会に対する教皇の権限は、徐々に縮小していた<sup>6</sup>。一方で、イタリア半島と教皇権との関係は緊密になっていった。例えば財政面では、ヨーロッパ各地の司教区から教皇庁への税収は縮小する一方、教会国家内及びイタリア半島内の聖職者や修道院への課税が 16 世紀以来拡大したため、教会歳入自体は微増した<sup>8</sup>。人事面から見ても、近世の教皇は全てイタリア人で、枢機卿の大部分もイタリア人が占める状態であり、イタリア貴族家系と教皇庁は緊密な関係を築くようになった<sup>9</sup>。さらにイタリア諸国における異端審問の実施や、地方の司教区における修道会の地位の強化（司教の輩出や聖職者教育の実践など）を通して、教皇権はイタリア諸国への実質的な政治的介入を強めていたとされる<sup>10</sup>。つまり、イタリア半島外において司教の任命権などの宗教権力が弱まる一方、教皇権のイタリア半島諸国への宗教的影響力は強まり、それを介して政治的干渉も大きくなったといえる。

イタリア半島での権威を強化した傍ら、教皇は一国の世俗君主としても活発に活動していた。著名な教会史家プローディの主張によれば、15 世紀以来教皇らは、枢機卿会議、すなわちカトリック教会の最高位の評議会の権力を削ぎ、さらに 16 世紀には聖省と呼ばれる専門委員会を立ち上げ、徐々に官僚機構を作り上げていった。この過程で教会国家は、15、16 世紀に他のヨーロッパ君主国に先んじて、聖俗の首長という 2 つの面を併せ持つ教皇のもと、官僚機構を発展させ中央集権化を成し遂げたというのである。この主張は研究者の間で議論を巻き起こしたが、その後の教会国家研究に与えた影響は大きく、現在まで引き継がれている点もある<sup>11</sup>。17 世紀前半までに

<sup>6</sup> 1516 年のフランス国王との政教条約により、フランス・カトリック教会は聖職者の国王への従属が認められ、すでに国家教会的性格を強めており、これにルターの宗教改革、イングランドの国教会独立が続く。ただし、パートナーによればルターの宗教改革とイングランド国教会の独立はそれほど教皇庁の教会歳入に大きい影響を与えることはなかった。むしろ「宗教改革は、すでに経済面では終わりを迎えつつあったプロセスに終止符を打ち、法的な正当化を与えた」と解釈している。

P. Partner, 'Papal financial policy in the Renaissance and Counter-Reformation', *Past and present*, vol. 88, no. 1, (1980), p. 49.

<sup>7</sup> 教皇の統治領土を表すため、本稿では工藤及び原田の研究にならい、同時代の史料に見られる「教会国家」(Lo Stato della Chiesa, lo Stato ecclesiastico) という語を用いる。工藤達彦「16 世紀『教会国家』の統治官と布告」『広島史学研究』238 号 2002、pp.1-20; 原田亜希子「教会国家形成期における首都ローマの行政活動: 16 世紀ローマの都市評議会議事録を用いて」『イタリア学会誌』62 号 2012、p. 75.

<sup>8</sup> Partner, 'Papal financial policy', pp. 46-49.

<sup>9</sup> アドリアーノ・プロスペリ(著)、大西克典(訳)『トレント公会議 その歴史への手引き』(知泉書院、2017)(原著 2001 年)、21-27 頁。

<sup>10</sup> G. Fragnito, 'Istituzioni ecclesiastiche e costruzione dello Stato: Riflessioni e spunti' in E. Bonora and M. Gotor (eds.), *Cinquecento italiano: Religione, cultura e potere dal Rinascimento alla Controriforma* (Bologna: il Mulino, 2011), pp. 16-34.

<sup>11</sup> P. Prodi, *Il sovrano pontefice* (Bologna: Il Mulino, 1982), 2<sup>nd</sup> edition, 2006. 教皇庁と教会国家に関する基本的な研究史は cf. M. A. Visceglia, 'Burocrazia, mobilità sociale e patronage alla corte di Roma tra

は、地方財務聖省や境界聖省など国家統治に関わる聖省の整備は一層進んだ<sup>12</sup>。加えて、教会の封土であったイタリア半島中部のフェッラーラ公国やウルビーノ公国を教会国家へ統合することに成功し、教会の直轄領を拡大させた<sup>13</sup>。

この中央集権化・官僚機構化に際して鍵となったのがカルディナル・ニポーテであったとされる。プローディの解釈によれば、カルディナル・ニポーテは、教会国家の形成と教皇庁の中央集権化の過程で、教皇から大権を委任され、国家統治を補佐する役割が与えられた<sup>14</sup>。実際に16世紀以降、それぞれの教皇は就任に際して、教皇小勅書を発給し、自身の甥に、教会国家統治の中核に関わる役割を託した。16世紀の間はそう単純でない場合もあるが、17世紀前半には完全に慣習として確立され、フランスの歴史家の言葉を借りれば、1621年にカルディナル・ニポーテの「古典期(l'âge classique)」<sup>15</sup>に至った。ただしウルバヌス8世期には早くも、ネポティズムの正当性が不安定になる兆候もないわけではなかった。例えばウルバヌス8世は自身の治世後半には、神学者を召集し、わざわざネポティズムの正当性を問う諮問を行っている。ただし本格的に危うくなるのは17世紀後半に入った後である。その頃から、教皇庁内ではしばしばネポティズム廃止の動きが出てくるようになるのである<sup>16</sup>。このような経緯の中で、本稿で扱うフランチェスコ・パルベリーニの活動時期の特徴は、翳りを伴い始めながらも、基本的にはカルディナル・ニポーテの存在感が最も安定していた時期だったということになる。それは教会国家の中央集権化・官僚機構化が進展する時期とも一致する。

ただし、教皇の小勅で示されるカルディナル・ニポーテの制度上の位置づけが、どれだけ統治実践に反映されたかは未だ議論的となっている。これについての具体的な議論は第2章で取り扱いたい。

いずれにせよ、カルディナル・ニポーテに関する研究史は、教皇庁及び教会国家の中央集権過程における政治行政上の役割と、それを支えるパトロン・クライアント関係の構造という点に集約される。だが実際には、このような状況ではカルディナル・ニポーテの同時代的「重要性」を

---

Cinque e Seicento', in E. Valeri and P. Volpini (eds.), *La Roma dei dei papi: la corte e la politica internazionale (secoli XV-XVII)*, (Roma: Viella, 2018), (初出 1995 年) ; M. Caffiero, 'Roma nel Settecento tra politica e religione. Dibattito storiografico e nuovi aprocci', *Dimensioni e problemi della ricerca storica*, no.2, (2000), pp. 81-100; G. Signorotto and M. A. Visceglia, 'Introduction', in M. A. Visceglia and G. Signorotto (eds.), *Court and politics in papal Rome, 1492-1700* (New York: Cambridge University Press, 2002), pp. 1-7.

<sup>12</sup> 地方財務聖省については S. Tabacchi, *Il Buon Governo* (Roma: Viella, 2007). 境界聖省に関しては今後の本格的な研究が待たれる。

<sup>13</sup> フェッラーラ併合については A. Gardi, 'La nascita di una Legazione: Clemente VIII a Ferrara (1598)', in A. Turchini (ed.), *La legazione di Romagna e i suoi archivi. Secoli XVI-XVIII* (Cesena: Il Ponte Vecchio, 2006), pp. 59-90; B. Emich, 'Potere della parola, parole del potere: Ferrara e Roma verso il 1600' *Dimensioni e problemi della ricerca storica* vol. 2 (2001), pp. 79-106. ウルビーノ併合を焦点に据えた本格的な研究は現状なされておらず、今後の進展が望まれる。

<sup>14</sup> Prodi, *Il sovrano*, p. 193. 当時ヨーロッパで普及していた宰相制との類似も指摘されている。Cf. *ibid.*; W. Reinhard, 'Papal power and family strategy in the sixteenth and seventeenth centuries' in R. G. Asch and A. M. Birke (eds.), *Princes, patronage, and the nobility: the court at the beginning of the modern age c.1450-1650* (Oxford 1991), pp. 329-356, 特に pp. 341-342; F. Benigno, 'Nipoti favoriti: Ripensare il nepotismo papale' in Id. (ed.), *Favoriti e ribelli: stili della politica barocca* (Roma: Bulzoni, 2011), pp. 79-97, 特に pp. 84-88.

<sup>15</sup> Laurain-Portemer, 'Absolutisme et nepotisme', pp. 513-518.

<sup>16</sup> A. Menniti Ippolito, *Il tramonto della Curia nepotista* (Roma: Viella, 1999), 2nd edition 2008, pp. 75-80; Benigno, 'Nipoti favoriti', pp. 79-80, 92-93.

完全に測れているとは言えない。近世教皇庁の宮廷においては、名誉の分配や派閥対立の調停といったことから、個人の振る舞いや秘密の保持に至るまで、日常の主体的な活動が権力者として重い意味を持っていた。学芸パトロネジの活動もまた、不可欠な要素といえよう。さらに、同時代人がどのようにカルディナル・ニポーテを認識していたのかも問わねばならない。これらの側面を扱う研究蓄積は独立したままであり、生産的に統合されているとはいえない<sup>17</sup>。

この研究史上の問題に応じるために、本稿は「古典期」にカルディナル・ニポーテの役割を担ったフランチェスコ・バルベリーニを取り上げることによって、カルディナル・ニポーテの「重要性」をより多角的に分析する。ウルバヌス8世の甥であったフランチェスコ・バルベリーニは、教会国家監督官である一方で、宮廷の日常的なポリティクスを生きる人物でもあり、また多くの芸術家のパトロンでもあった。本稿では、これらに焦点をあて、カルディナル・ニポーテの多面的な「重要性」を分析する。

従来の研究では見落とされてきたが、カルディナル・ニポーテは行政的役割に留まらず、ローマ宮廷において、日常的な宮廷政治で中心的地位を保ち、また祝祭の時期にはパトロネジ運営を果たし、さらに非常事態下では統治及び戦争遂行に中心的役割を果たした。これらを踏まえると、宮廷においてカルディナル・ニポーテのみが、これほどの多様な活動をこなし、中心的役割を担っていたことがわかるだろう。

## 2 カルディナル・ニポーテの政治権力をめぐって

本節では、行政制度上のカルディナル・ニポーテの役割について、現時点までの議論を整理しておきたい。枢機卿らは、カルディナル・ニポーテを教皇庁統治に不可欠とみなしており、また市民の側も、教皇の甥は教皇庁の中心的存在だと考えていた<sup>18</sup>。にもかかわらず、カルディナル・ニポーテがどれだけ行政業務や意思決定に関わっていたかについて、必ずしも研究者間で意見の一致をみえない。

プローディの見解をもう一度確認しておく、カルディナル・ニポーテは、国家形成に伴う官僚機構の増大を支えるための大臣として理解できるものだった。それに対し、官僚機構におけるカルディナル・ニポーテの影響力を疑問視する代表的な研究者は、ドイツ人の歴史家ヴォルフガング・ラインハルトである。彼は以下の2つの点から否定的評価を下している。第1に、カルディナル・ニポーテは様々な官職を保持していたものの、実質的にはそれらの役割をほとんど果たしていない。第2に、カルディナル・ニポーテは政策決定に影響力を持っておらず、特に最終決定は結局は教皇に委ねられていた。

ラインハルトの否定的見解はさらに、近世における教皇の指示伝達の方法にも起因している。彼によればこの時期、教皇は指示を伝達するのに際して、カルディナル・ニポーテを介して私的

<sup>17</sup> 特に文化史に関わる研究蓄積は膨大である。代表例として、F. Haskell, *Patrons and painters: A study in the relations between Italian art and society in the age of the Baroque* (New Haven: Yale University Press, 1963), 2nd edition, 1980; M. Biagioli, *Galileo, courtier: The Practice of science in the culture of absolutism* (Chicago: University of Chicago Press, 1993); F. Hammond, *Music and spectacle in Baroque Rome* (New Haven: Yale University Press, 1994); P. Rietbergen, *Power and religion in Baroque Rome: Barberini cultural politics* (Leiden: Brill, 2006)。16世紀、17世紀の教皇庁の宮廷派閥については M. A. Visceglia, 'Factions in the Sacred College in the sixteenth and seventeenth centuries', in Visceglia and Signorotto (eds.), *Court and politics*, pp. 99-131。

<sup>18</sup> L. Nussdorfer, *Civic politics in the Rome of Urban VIII* (Princeton: Princeton University Press, 1992), p. 35; Benigno, 'Nipoti favoriti', pp. 84-91; Menniti Ippolito, *Il tramonto*, pp. 71-126。

書簡を交わしていた、つまり非公式な方法で指示を伝達する慣習があった。その背景には、教皇庁の行政管理システムが過度に形式化し、決定の変更や撤回は多くの法的問題や果てしない法的訴訟を伴うようになっていたとの事情があったという。ゆえに日常業務に関しては、私的仲介者としてカルディナル・ニポーテを置き、円滑な統治を図ったとされる。例えば外国駐在の教皇大使に対しては、ラテン語による小勅書とイタリア語によるカルディナル・ニポーテからの書簡の両方を並行して利用していた。小勅書は儀礼的でありすぎたため連絡手段は実質的にイタリア語の書簡に委ねられており、それゆえこれらはカルディナル・ニポーテの個人的意見として取り違えられてはいけな、とラインハルトは主張している<sup>19</sup>。

これらを踏まえてラインハルトが言うには、カルディナル・ニポーテは実権を握ることはなく、政策は国務秘書官の補佐を伴いつつ教皇によって策定されていた。ラインハルトはこうして、制度と実態の乖離、公的性格と実質的権限の溝を常に意識し、「仰々しい公文書の法的フィクション」を疑う姿勢を貫いている<sup>20</sup>。このように彼は、カルディナル・ニポーテの主體的かつ実態的な影響力の行使を否定しているのである。

むしろラインハルトは社会史的ネポティズムという観点から、カルディナル・ニポーテの役割はパトロン・クライアント関係を維持する潤滑油としての機能にあるとしている。簡潔に言えば、甥はパトロン・クライアント関係を取り結ぶために、教皇の代理として様々な勢力とのコミュニケーションを取り持つが、政治、行政に及ぼす実質的な影響力は持ち合わせていない、というのがラインハルトの評価である。結局カルディナル・ニポーテの役割は、教皇の社会的代替物でしかないというのである<sup>21</sup>。たしかに、教皇庁におけるパトロン・クライアント関係の重要性自体は、研究者の間でも共通見解となっている<sup>22</sup>。しかしながら研究史上で未だに問題なのは、カルディナル・ニポーテの行政活動の実態や、政策への影響力の有無である。

この議論に対して近世教皇庁の研究者メンニーティ＝イッポーリトは、近代国家形成の視座とは若干異なりつつも、ブローディの主張に沿って、教皇庁の中央集権化によりカルディナル・ニポーテのような権力者が制度的に必要になってきたとしている<sup>23</sup>。さらに彼は考えを進めて、むしろ制度以上に実際の役割は非常に幅広かったのではないかと、例えば教皇の身体的不調の時にはカルディナル・ニポーテが職務を代行した場合もあったのではないかと、と問いかける<sup>24</sup>。この発想には納得できる部分もあるが、史料に基づいているわけではなく、推測の域を超えるものではない。

これらの議論が存在する中で、本節ではいま一度、カルディナル・ニポーテの制度上の官職に立ち戻り、現在なされている議論と照合して、今後必要とされる議論の方向性を整理しておきたい。

<sup>19</sup> Reinhard, 'Papal power', p. 342.

<sup>20</sup> Reinhard, 'Papal power', p. 342. これは特に、次の研究への批判から生まれたものである。Laurain-Portemer, 'Absolutisme et nepotisme'.

<sup>21</sup> Reinhard, 'Papal power', pp. 343-344.

<sup>22</sup> 例えばナスドルファーの研究においても、カルディナル・ニポーテが都市と教皇をつなぐ重要な仲介者であったことが見出される。Nussdorfer, *Civic politics*, p. 196. またカトリック諸君主による枢機卿団内での派閥形成でもカルディナル・ニポーテが鍵であるとみなされていた。Visceglia, 'Factions in the Sacred College', p. 114. ヴェシェーリャによればカルディナル・ニポーテはスペイン人から「叔父の寵臣 (valido de su tío)」、フランス人から「幸運の君主 (le prince de la fortune)」と呼ばれていた。

<sup>23</sup> Menniti Ippolito, *Il tramonto*, pp. 171-172; Id., *Il governo dei papi*, pp. 105-132.

<sup>24</sup> Menniti Ippolito, *Il governo dei papi*, pp. 122-123.

カルディナル・ニポーテとしての業務に関するある指南書<sup>25</sup>によれば、カルディナル・ニポーテは公的には高等裁判聖省（教皇庁諮問法院とも訳される）、地方財務聖省<sup>26</sup>、教皇庁会計院<sup>27</sup>に参加し、また国家書記局の外交活動の監督<sup>28</sup>も行っていた<sup>29</sup>。高等裁判聖省と地方財務聖省については、カルディナル・ニポーテは慣習的に、長官職をも担っていた。

まず内政に関わる官職と実態について、研究上の見解が食い違う所がいくつかある。例えば教皇庁機構を概観したデル＝レの著作によれば、高等裁判聖省長官職は存在したものの、実質的に聖省活動を統括していたのは聖省書記官であった<sup>30</sup>。だが、これでカルディナル・ニポーテの実質的な行政活動に関して結論づけることも早計である。ステーファノ・タバッキの、地方財務聖省に関するより新しい研究によれば、カルディナル・ニポーテは実際に制令を発布することはなかったものの、聖省の活動はカルディナル・ニポーテ、聖省書記官と地方行政機関という3つの主体が密接に連携することで成立していたという<sup>31</sup>。加えて、17世紀後半の枢機卿デ＝ルーカの説明によれば、教皇の甥は教皇庁の全ての交渉に参加しており、外交大使や教皇庁官僚は、教皇に謁見したあとカルディナル・ニポーテにも謁見するのが常であったようである<sup>32</sup>。

外交活動へのカルディナル・ニポーテの関与の程度についても、未だ不鮮明である。カルディナル・ニポーテから外交使節への書簡は必ずしも彼自身の意見表明ではない、とラインホルトは唱える一方で、フォージの研究によれば、ウルバヌス8世期にスペイン駐在教皇大使であったジュリオ・サッケッティは、カルディナル・ニポーテからの指示書と、特に教皇から信頼の厚かった国務秘書官、ロレンツォ・マガロッティからの書簡の両方を受け取っていた。この事実から問題になるのは、国務秘書官マガロッティを介して連絡を取っているにもかかわらず、教皇がカルディナル・ニポーテを通じた事実上の指示文書をわざわざ出す必要があったのか、ということである。フォージは単純にカルディナル・ニポーテとジュリオ・サッケッティとの独立した書簡とみなしているが<sup>33</sup>、ラインホルトの指摘を考慮にいれ、あらためて考察する必要がある。このように、カルディナル・ニポーテの影響力については、今後本格的な調査が必要な点は少なくない。

さらに注意すべきは、制度あるいは実践の変遷である。制度についていえば、そもそも1588年の聖省体制自体が新しいものであり、その後も聖省の数が増減する。地方財務聖省についていえばその設立はさらに遅く、クレメンス8世治下（1592-1605）である。聖省体制の変遷に加え、カルディナル・ニポーテと聖省との関係性も変化していく。タバッキの研究に従えば、ウルバヌス8世期を最後に、地方財務聖省書記官と教皇家系とのパトロン・クライアント関係は薄くなって

<sup>25</sup> 詳細は第3節を参照。

<sup>26</sup> 高等裁判聖省については cf. N. Del Re, *La curia romana: Lineamenti storici-giuridici* (Vaticano 1998), 4th edition, pp. 349-352. 地方財務聖省については cf. Ibid., pp. 353-355.

<sup>27</sup> 教皇庁会計院については次を参照。Nussdorfer, *Civic politics*, pp. 46-50; Del Re, *La curia romana*, pp. 285-297.

<sup>28</sup> 国家書記局の国務秘書官とカルディナル・ニポーテの同一性の問題については cf. Menniti Ippolito, *Il tramonto*, pp. 40-41, 61.

<sup>29</sup> Rietbergen, *Power and religion*, p. 145.

<sup>30</sup> Del Re, *La curia romana*, p. 349.

<sup>31</sup> S. Tabacchi, 'Per la storia dell'amministrazione pontificia nel Seicento: organizzazione e personale della congregazione del Buon Governo (1605-1676)', in A. Jamme and O. Poncet (eds.), *Offices et papauté, 14.-17. siècle: charges, hommes, destins* (Rome: l'Ecole Française de Rome, 2005), pp. 613-634.

<sup>32</sup> Menniti Ippolito, *Il tramonto*, p. 33.

<sup>33</sup> I. Fosi, *All'ombra dei Barberini* (Roma: Bulzoni, 1997), pp. 63-75.

いき、官僚機構としての独立性が徐々に聖省の中に育まれていくという<sup>34</sup>。要するに、カルディナル・ニポーテの制度と実践間の関係性は時間とともに変わりうるのである。このため、ラインハルトが前提とした教皇庁内のパトロン・クライアント関係の構造は、全ての時期に適応することはできないかもしれない。さらに、組織ごとにカルディナル・ニポーテとの関係が違ふ可能性もあるだろう。いずれにせよこれらのダイナミクスを考慮に入れることは必須であり、そのためラインハルトのパウルス5世期のカルディナル・ニポーテを基礎とした研究は、他の時代の研究と比較されることで確認され、あるいは乗り越えられねばならない。

ここまでが、カルディナル・ニポーテに関する主要な議論であり、それは要するに統治における役割、特に政治行政上の実質的役割をめぐるものであったといえる。しかし本稿が重視する点は、カルディナル・ニポーテの権力について、以上のような官僚制の観点に留まらず、視野を広げて検討することにある。そのために、ここからは実際にウルバヌス8世期にカルディナル・ニポーテとして活動したフランチェスコ・バルベリーニ（1597-1679）に焦点を当て、具体的な事例から教皇庁における権力の全体像を探っていきたい。

簡単に生い立ちを概観しておくと、フランチェスコ・バルベリーニは、1597年9月23日にフィレンツェにて、後に教皇ウルバヌス8世となるマッフェーオ・バルベリーニの実兄と、その妻の子として生まれた。フランチェスコは長男であり、次男はタッデーオ、三男はアントーニオと名付けられた。1604年には、マッフェーオ・バルベリーニのいるローマへ父とともに移ったと考えられる。おそらくコッレージョ・ロマーノで、叔父であり学才に富んでいたマッフェーオ・バルベリーニの激励も受けながら、教育を受けたとされている。教育の過程で彼はラテン語のみならず古典ギリシャ語も学んでおり、さらに修辞学、歴史、物理などを勉強した痕跡も残っているという。最終的には1623年に、ピサ大学でローマ法・教会法を修めたと考えられる。総じて高度な教育を受けていたといえるだろう。ただし学位を取った年に叔父の教皇就任が決まり、フランチェスコはローマに呼ばれ、1623年10月2日に叔父である教皇により枢機卿に叙せられた<sup>35</sup>。こうして彼は、若くしてカルディナル・ニポーテの役割を担う運命となったのである。

### 3. 日常の権力—フランチェスコ・バルベリーニへの助言

カルディナル・ニポーテの立場になるにあたって、フランチェスコ・バルベリーニのために「手引き」が匿名で作成された。本節ではこの手引きを用いて、当時カルディナル・ニポーテとして想定された役割を見ていき、宮廷の日常における主体性を検討したい。

内容に入る前に、手引きという史料の持つ意味を踏まえておきたい。ここで鍵となるのは、近世教皇庁の行政文化である。当時の教皇庁では、役人が新たな職務に着任する際、過去の指示書を複写して参照したり、また前任の役人たちの（私的も公的も含む）書簡のやりとりを読むことで、教皇庁の状況や国際情勢、官職の役割について学ぶという慣習があった<sup>36</sup>。教皇庁の役人たち

<sup>34</sup> Tabacchi, 'Per la storia dell'amministrazione', pp. 618-619. タバッキによれば、後続のインノケンティウス10世からクレメンス9世の期間に地方財務聖省書記官のカルディナル・ニポーテからの自立性が徐々に実質的に獲得された、とされる。これはメンニエーティ=イッポーリトの説明する、国務秘書官職の独立性の獲得の過程と時期的に重なっており注目に値する。Cf. Menniti Ippolito, *Il tramonto*, pp. 29-70.

<sup>35</sup> 伝記的詳細は cf. A. Merola, 'Francesco Barberini' in *Dizionario biografico degli Italiani*, vol. VI, Roma 1964, pp. 172-176; Rietbergen, *Power and religion*, pp. 143-180, 特に pp. 158-159.

<sup>36</sup> Fosi, *All'ombra*, pp. 67-69.

は、このような慣習の中で、自らの官職を全うし、教皇庁で出世の道を開こうとしたのである。

おそらく国家・教会統治の実践は、このような形での継承に基づき、長い歴史の試行錯誤から発展したと考えられる。16世紀半ばに生まれたとされるカルディナル・ニポーテの役割も、複雑な教皇庁組織の中で突然、理論的かつ効率のよいシステムとして出現したというよりも、聖省体制の発展やその他の情勢の変遷に応じてその時どきに依って展開していった。

以下で紹介する手引きはこの意味で、それまでのカルディナル・ニポーテの役割の蓄積に基づいて彼に期待される事柄を整理し、理解しやすい形で提示し直したものの、カルディナル・ニポーテのまとまった役割を再創造しているものと捉えることができる。実際にこの手引きの著者は、聖書やその他の書物に加え、経験を積んだ枢機卿や宮廷人に話を聞いて書いた<sup>37</sup>、と述べている。この事実に従えば、著者は実際に、カルディナル・ニポーテの伝統的实践に関する知見も踏まえて手引きを書こうとしていることが窺える。ゆえにこの手引きを読むことは、17世紀前半までに蓄積され、そして期待されたカルディナル・ニポーテの日常的な役割の実践に触れるために、有効な手段の1つといえる。

これから見る手引きは歴史家リートベルゲンにより研究されたものである。匿名で書かれているため筆者は不明だが、内容から推測するに1623年と1624年の間に書かれ、フランチェスコ・バルベリーニに宛てられたと考えられている<sup>38</sup>。この手引きは、彼の日常的なレベルでの重要性を示している。具体的には彼は教皇庁を統括する官僚だが、それに加え、政治と私的駆け引きが結びついた宮廷社会の中の中心人物であり、主体的に活動することが求められていたのである。以後、リートベルゲンの要約に依拠しながら見ていきたい。

手引きではまず、カルディナル・ニポーテの官僚的業務が説明される。カルディナル・ニポーテは教皇庁に毎年幾千と届く書簡を読み、教会国家の統治を監督するために様々な機関との連絡を取り、謁見を受ける。また教皇に1日に2回会い、報告すべき事実と、それについて取るべき行動の選択肢を提言し、退出して決定を待つといったことが求められる。また協力者としての専門家と官僚を選抜することも重要な仕事なので、カルディナル・ニポーテは、統治に関わる高官候補者の書類を作っておく必要性もある。その書類には候補者の背景、受けた教育、関係する人物、態度といった情報が含まれねばならない。

一方で、手引きからは、官僚業務に留まらない役割も見出される。匿名の筆者によれば、カルディナル・ニポーテは教皇の宮廷の名声をさらに高めるため、徳(virtù)のある人物たちを集めなければならない。カルディナル・ニポーテは、名誉を、それに値する人々に分配するよう配慮し、勇敢さと徳の名声を携えた人々を、その人たちがどこに住んでいようとも、正当に評価することを示し、ローマに導くようにすべきなのである。とはいえ、名誉と報酬の適切な分配は簡単な仕事ではないので、ここでも宮廷内の人間の情報収集が重要であると語られている。

<sup>37</sup> Rietbergen, *Power and religion*, p. 144.

<sup>38</sup> Rietbergen, *Power and religion*, pp. 143-180. リートベルゲンの使用したものは右に所蔵されている。Biblioteca Apostolica Vaticana, Barberini Latini, vol. 5672. 以下の論文でもこの助言が考察されている。A. Kraus, 'Amt und Stellung des Kardinalnepoten zur Zeit Urbans VIII (1623)', in *Römische Quartalschrift für Christliche altertumskunde und Kirchengeschichte*, (1958), pp. 238-243; A. Menniti Ippolito, 'The secretariat of state as the pope's ministry', in Visceglia and Signorotto (eds.), *Court and politics*, pp. 132-157, 特に pp. 145-146.

また、宮廷での派閥対立にも触れている。曰く、宮廷は人同士の対立であふれており、その多くが身分と序列の問題に端を発するものである。そして作者は、教会国家の都市エリートたちの怨恨と報復が、非常に破壊的な結果をもたらしようということも付け加えている。

さらに手引きにおいては、より個人的な振る舞いについても述べられている。以下で見るように我々は、振る舞い一つ一つが政治的結果を左右する宮廷の様子と、そこでカルディナル・ニポーテがいかに振舞うべきかということを知ることができるのである。

手引きに沿うと、例えばカルディナル・ニポーテは儀礼に通じているだけでなく、洗練さも備えていなければならなかった。それは教皇庁の上に立つものとして必須だった。カルディナル・ニポーテの宮廷は、徳が示され、また教示されるべき場所であった。そこでは軽妙でいることがよく、挨拶をするときには微笑んでいなければならない。人を待たせてはいけない。人の話を妨げてはならない。ただし非公式な会話ではユーモアも許される。修道院的な厳格さと放蕩な者の好色さの中間で舵をとるのが効果的であると手引きでは語られている。

さらに宮廷は、絶え間無い政治の駆け引きの場であるので、公的な場面、あるいは思いもよらないような政治交渉の瞬間において、どう振る舞うかというのが重要だと著者はいう。例えば、他人の主張をいつも慎重に、時間をかけて聞くようにすべきだと言われている。というのもゆっくり喋り、返事をする事で、期待通りの効果を得ることができるだろうからである。

常に誠実であることが肝要だが、時には真実が有害な時もあるという。その場合には、誠実でないことも許される。この手引きの作者の考えでは、「真実を伝えることが時には公益を損なうかもしれない」というプラトンの説明は正しかった。そのため、もしも嘘をつくことで神の怒りを避けられるのであれば、人は真実を偽り隠すことも許されるのである。

さらに助言者がいうには、枢機卿として最も重要な技術は、秘密を保持できることであり、また他人の持っている秘密を自分に打ち明けさせることである。これが必要なのは、明らかにカルディナル・ニポーテが、無数の最高機密の交渉の中心にいるからである。カルディナル・ニポーテの考えを言葉の一つ一つから、あらゆる表現から探し出そうとする人々がローマ宮廷には群がっており、カルディナル・ニポーテはそのような人々に常に囲まれているのである。

若く経験の浅いフランチェスコのための最良の策は、ある1つのことを誰にも言わないということからはじめ、そしてそれを習慣にすることである、と著者は提案している。また、すでに知っている秘密を教えられた時は、驚いたふりをするべきである。より良いのは、いかなる秘密も聞くのを断ることからはじめることだ。そうすることで、人々は甥をとて信頼に値する人物だとみなし、結果として、常に彼に秘密を打ち明けるのである。

これらに基づけばカルディナル・ニポーテは大量の情報を処理し、行政を監督する最上級の官僚である一方で、宮廷人でもあった。名誉の分配の必要性、対立の調停、そして宮廷の振る舞いと秘密の扱い方など、宮廷世界での日常的なポリティクスにかかわる実践が求められていることは、手引きから明らかである。

むしろ、上述の全てを実際にフランチェスコがこなしていたかは別の問題である。彼は実際にはそれほど外交的手腕を発揮することはできなかったと評されている。例えば第5節でみるように、カストロ戦争の発端は、パルマ公オドアルドとの交渉の失敗と、それに起因するバルベリーニ家とパルマ公の私的対立にあった。彼が、この手引きで提示されるカルディナル・ニポーテの理想的な姿を、常に維持していたとは言い難い。

それでもなお、この手引きは、1623年までにカルディナル・ニポーテが果たしていた日常的活動の一端を示すもの、そしてフランチェスコ・バルベリーニへの期待を明らかにするものとして有益である。というのも、この手引き自体が様々な枢機卿や宮廷人の経験に基づき書かれたものだからである。手引きに従えば、その役割の一部は、官僚業務であった。しかしそれに留まらず、カルディナル・ニポーテの宮廷の日常における主体的な役割—名誉分配の管理、宮廷の平静維持、公的書簡だけでなく「秘密」として彼になだれ込む情報の処理—も、この手引きは示唆している。

#### 4. 祝祭の権力—フランチェスコのオペラ・パトロネジ

匿名の助言者が薦めたように、フランチェスコ・バルベリーニは、ローマに最高の徳を持った人たちを招くことに熱心であった。本節では、フランチェスコのオペラ・パトロネジの展開を概観し、それを、ヨーロッパ諸宮廷間の学芸パトロネジの競合という文脈に位置づける。そうすることで明らかになるのは、激しい競合の最中で、フランチェスコ・バルベリーニがオペラ・パトロネジで重要な役割を果たしていたということである。

バルベリーニ家の学芸パトロネジは、多くの分野で現代まで残る膨大な文化的遺産を生み出したが、音楽もその一つであった。フランチェスコ・バルベリーニの抱えた音楽家を見るだけで、彼の音楽パトロネジの水準の高さがわかる。例えば彼は1634年8月時点で143人の宮廷人員を抱えていたとされるが、その中には、ヨーロッパ中で名を知られた演奏家・作曲家のフレスコバルディ(1583-1643)やカプスベルガー(1580-1651)などがいた。他にも著名な音楽家を抱えており、フランチェスコはこれらの音楽家に手厚い保護を与えていた。宮廷全体の1年の出費6,000スクーディ以上のうち、音楽家への給料はその半分近くを占めていたとされる<sup>39</sup>。著名な音楽家の存在は、パトロンの名声を高め、さらにはローマ宮廷の威信を高めることにも寄与したはずである<sup>40</sup>。

バルベリーニ家の音楽パトロネジのうち、主にバルベリーニ一族の私邸で催されるオペラ上演への力の入れ具合は特に際立っていた。オペラはほぼ毎年謝肉祭の時期に上演されており、特別な機会(外交使節や外国の皇太子などの来訪)には、それに見合うよう舞台装置なども一層工夫された。音楽家はバルベリーニ家の3人の兄弟たちがそれぞれ提供しており、特に歌手は、フランチェスコと三男アントーニオの宮廷で養っていたシスティーナ礼拝堂聖歌隊の者たちが、その時々に参加していた。

ただしオペラ上演が定期的に行われるようになったのは、1630年代に入ってからである。すでに1628年8月と1629年6月には音楽を伴った劇がフランチェスコの後ろ盾で上演されていた。しかし初めての本格的オペラ作品と言われる『聖アレッシオ』が準備されたのは1631年のことである。同作品が、年内に上演されたかは定かではないが、最終的に1632年の2月の謝肉祭で、皇帝の外交使節歓待のために上演された<sup>41</sup>。この『聖アレッシオ』を機に、ほぼ毎年のようにフランチェスコはオペラ事業を展開していく。

<sup>39</sup> Hammond, *Music and Spectacle*, pp. 77-78.

<sup>40</sup> ただしフランチェスコに劣らず、バルベリーニ家のもう1人の枢機卿でありフランチェスコの弟であるアントーニオもイタリアあるいはヨーロッパで重要な音楽家を多数擁していた。例えば彼は、1635年にフレスコバルディから代表作『音楽の花束』を献呈されている。かつ、一流の歌手が彼ののもとに集まっている。

<sup>41</sup> Ibid., pp. 200-205.

1633年の謝肉祭では、次男のタッデーオ・バルベリーニがオペラ上演を主体的に行ったものの、フランチェスコも深く関わっており、当時最も偉大な舞台装置家と見なされていたフランチェスコ・グイッティをフェッラーラから呼び寄せるほどの意気込みであった。その成果が、1633年上演の『ジョルダナーノの上のエルミニニア』である<sup>42</sup>。タッデーオはこののちオペラ上演に大きく関わることはないが、フランチェスコはといえば、オペラの上演にさらに力を入れていった。

1634年にはポーランド王の弟がローマに来る機会があったため、フランチェスコが総額2,415スクーディをかけて『聖アレッシオ』を絢爛豪華に再演した<sup>43</sup>。その後、1637年まで彼はオペラ上演を毎年続けた<sup>44</sup>。1638年の謝肉祭もフランチェスコがプロデュースしたが、作詞を担当したジューリオ・ロスピリョージによるならばそれほど豪華ではなかった<sup>45</sup>。

1639年は『アエギトス』と『聖ボニファティウス』が繰り返された。今回の『アエギトス』のオペラ・プロダクションは、新しく建築された、4,000人を収容するバルベリーニ家の大劇場で上演された。新劇場に加え、この上演のために、ジャンロレンツォ・ベルニーニや作曲家ヴィルジーリオ・マツォッキを含む、バルベリーニ家で特に栄誉のある芸術家や職人が雇われ、最終的に『アエギトス』の新プロダクションにはおよそ3,668.32スクーディが投入された<sup>46</sup>。

1640年については記録が不明瞭だが、いずれにせよ400スクーディの音楽劇が上演された程度と考えられている。1641年は、フランチェスコのオペラと兄弟たちの喜劇が用意された。そのオペラに費やされた金額はおおよそ1,147.40スクーディに縮小している。

カストロ戦争の最中にあたる1642年の謝肉祭では、これまでと異なり、弟のアントーニオ・バルベリーニがオペラ上演を計画した。そのプロダクションにアントーニオは8,000スクーディを投じたと推測されるほど、力が入れたという<sup>47</sup>。ここまでの、ウルバヌス8世治世にバルベリーニ家によって舞台にかけられた作品の全てである。

ここで整理しておくと、オペラ上演に最も関わった人物はフランチェスコであったといえるだろう。次男タッデーオは自ら音楽劇を複数催していたものの、例えば1633年の上演ではフランチェスコも深く上演に関わっていた。また三男アントーニオの本格的なオペラ上演は1642年の1回のみである。アントーニオの上演には、他のどれにも劣らないほどの経費がかかっているが、1642年はカストロ戦争という今までにない極めて稀な状況であり、例外として考えても差し支えない。ではこのフランチェスコがかくも財と時間を費やしたオペラの上演は、当時いかなる意味を持っていたのだろうか。

17世紀のイタリアにおいて、オペラは最先端の音楽ジャンルであった。16世紀後半にフィレンツェで新たな様式が初めて取り入れられオペラができてくると、大きな成功を収めた<sup>48</sup>。こ

<sup>42</sup> Ibid., p. 206. ハモンドによれば、1633年、ヴェネツィア大使は、「技術士グイッティはフランチェスコとタッデーオとともに、1日のすべての時間を費やしている」と報告している。とりわけフランチェスコ・バルベリーニはオペラに熱中しているとも報告されている。(Archivio di Stato Venezia, Senato III, filza 106, fol.198v, January 1633)

<sup>43</sup> Ibid., pp. 208-214.

<sup>44</sup> Ibid., pp. 224-227.

<sup>45</sup> Ibid., pp. 231-235.

<sup>46</sup> Ibid., pp. 235-238.

<sup>47</sup> Ibid., pp. 240-244.

<sup>48</sup> Tim Carter, 'Stile Rappresentativo', *Globe Music Online*, 2001,

の時期ではモンテヴェルディによりマントヴァで上演された『オルフェオ』(1607)と『アリアナ  
の嘆き』(1608)が音楽史上の代表作としてしばしば位置づけられるが、フランチェスコ自身は  
オペラを、1626年にフィレンツェのメディチ家の宮廷で、1628年にフィレンツェとパルマで聴  
いていたことが分かっている。特に1628年にパルマで上演されたオペラは、メディチ家とファ  
ルネーゼ家の婚姻の祝祭のためのもので、ファルネーゼ家の誇る巨大かつ壮麗な劇場で演奏さ  
れた。そのオペラはまさにモンテヴェルディの作品であり、非常に盛大なものであったとされ  
る<sup>49</sup>。これらを目にしたフランチェスコは、その舞台に純粋に魅了されたかもしれない。上にみ  
たようにまさに1628年以降に、彼がオペラ上演に没頭し、後に大劇場の建築にまで着手したと  
いう事実は、大変示唆的である。動機が何であれ、フランチェスコ・バルベリーニが当時のオ  
ペラの上演を積極的に導入したのは、音楽史上の動向を鑑みれば十分野心的なことだったと考  
えられる。

ただし音楽的観点と同様に我々が考慮すべきは政治的観点である。すなわち、彼を取り巻いて  
いた、オペラを含む学芸パトロネジ上のヨーロッパ諸宮廷の競合に、注目する必要がある。この  
時代には、ヨーロッパの諸君主は精力的に、学問や芸術のパトロネジを展開して競り合っており、  
ローマもそこに参入していた。このような状況で、フランチェスコは先に匿名の助言者が示した  
とおり、徳を持った人々をローマに呼び寄せ、宮廷の繁栄に寄与しなければならなかったのであ  
る。それゆえにこそ、フランチェスコは膨大な見返りと敬意をもって最良の音楽家を自らの宮廷  
に引き入れ、イタリア半島で競合していたオペラのパトロネジにも参入したのではないだろうか。  
フランチェスコが他の宮廷でオペラを見た時、もちろんその芸術にいたく感動したかもしれない。  
ただし同時に、パトロネジ上の対抗意識を生み出したとしても不思議ではない。ローマに高貴な  
来訪者が来た際には、歓待の催しの中には盛大なオペラも含まれていた。

むしろ、宮廷のパトロネジ競争はオペラに限ったことではなく<sup>50</sup>、イタリア半島に限られたこと  
でもない<sup>51</sup>。17世紀前半のヨーロッパ宮廷の文化は、宗派と国境を超え、直接、あるいは間接的に  
影響しあい、競合しあっていた<sup>52</sup>。ときに文化パトロネジの競合の裏側では、学術資料や芸術品そ  
れ自体さえ、政治的な意味を伴いながら授受されていた<sup>53</sup>。

ヨーロッパに広がるこのような宮廷世界の中で、オペラ上演は華々しい趣味であるだけでなく、  
フランチェスコの地位からして、宮廷の長としての義務であったと言えるかもしれない。それゆ

<https://doi-org.othmer1.icu.ac.jp:2443/10.1093/gmo/9781561592630.article.26774> (last viewed 21 January 2020).

<sup>49</sup> Hammond, *Music and spectacle*, p. 184; パルマ劇場については次を参照。S. Piscicella, 'Political power through architectural wonder. Parma, Teatro Farnese' in M. Rosso (ed.), *Investigating and writing architectural history: subjects. Methodologies and frontiers* (Turin: EAHN, 2014), pp. 706-714.

<sup>50</sup> フランチェスコはすでに、宗教上のイメージ構築やプロパガンダのために、ヨーロッパで随一の学者たちを集めるべきで、また価値ある図書館や、教皇のイメージ戦略のためにアカデミーを作るべきであるという助言を受けていた。Rietbergen, *Power and religion*, pp. 153-158.

<sup>51</sup> 例えばリシュリューの率いるフランスは、7言語による聖書の編纂を計画するなど、極めて野心的な学問助成計画を展開しており、このためにローマ宮廷にいる中東系言語の学者を引き抜こうとしていた。Ibid., pp. 256-295. また同時代のスペインの寵臣オリバーレスも、国王の権威を強化するための文化政策を遂行した。J. H. Elliott, 'Court society in seventeenth-century Europe: Madrid. Brussels, London' in Id. (ed.), *Spain, Europe and wider world 1500-1800* (Padstow: Yale University Press, 2009), pp. 254-278.

<sup>52</sup> Ibid.

<sup>53</sup> Ibid., p. 271.

えにこそ、手引きのとおりフランチェスコは、文化パトロネジという点で彼自身とローマの名声を高めたのである。ただし文化パトロネジが、一族の名声にも資したという点は留意すべきである。このパトロネジは決して純粋に教皇権を代表するだけではなく、バルベリーニ一族の繁栄という私的側面とも分かちがたく結びついていた<sup>54</sup>。

いずれにせよ、以上の時代背景を考慮すれば、イタリアさらにはヨーロッパの宮廷間の競合の中で重要な文化プログラムを牽引した人物として、フランチェスコ・バルベリーニを評価できるのではないだろうか。宮廷間競争の力学におけるかかる活動の意義を鑑みれば、フランチェスコの活動が教皇庁においても極めて重要であったと理解できる。

## 5. 非常事態の権力—カストロ戦争

華々しい文化パトロネジの一方で教会国家は、ウルバヌス 8 世の治世末期（1641-1644）になると、イタリア諸国との戦争に突入する。カストロ戦争と呼ばれるこの戦争は、教皇側に期待した成果を得させなかったどころか、むしろバルベリーニ家の名声を内外で完全に失墜させてしまう。その理由は、対外勢力の多くを敵に回したからであり、また戦費増大を賄うため都市民衆に財政的負担を強いたからであった。

本稿においてこの戦争が重要なのは次の 2 つの点にある。第 1 に、緊急時の教皇庁政府において、教皇の甥たちが統治及び戦争の遂行に不可欠な役割を果たしていた。第 2 に、戦費調達のための度重なる重税が民衆の生活を脅かすにつれて、教皇の親族はその責任を問われ、教皇の甥を非難する言説が強まっていった。この第 2 の点はまさに、カルディナル・ニボーテの政治における重要性がいかに同時代人々々にとって明白であったかを示している。以下、ナスドルファーの事実の再構成に依拠しながら見ていきたい。

カストロ戦争は、パルマ・ピアチェンツァ公国の君主オドアルド・ファルネーゼ(1612-1646)（以下パルマ公とする）とバルベリーニ家との対立に端を発する。パルマ公は当時、軍事費の調達のため教皇庁金融システムを頻繁に利用しており、その結果債務の支払いに苦しんでいた。バルベリーニ家は、その状況を一族の利益に利用しようとし、1639 年 11 月から 1640 年 1 月にかけて、パルマ公の債務を軽減する代わりに、2 つの提案のいずれかを選択するよう彼に申しでた。1 つ目は、ファルネーゼ家領有のカストロ公領をバルベリーニ家に譲ること、2 つ目は、バルベリーニ家とファルネーゼ家との結婚、すなわち家門同士の同盟関係を築くことであった。これらの提案は、教皇の亡き後にもバルベリーニ家に十分な財産を確保するか、あるいはイタリア君主家系との同盟関係を通してバルベリーニ一族の政治的・社会的地位を強固にするためのものであった。しかしパルマ公は、バルベリーニ家を商人出の成り上がり者たちだと蔑んでいたため、教皇ウルバヌス 8 世に対しては敬意を持って接したものの、甥たちが提示する結婚の提案を馬鹿げたものとみなした。パルマ公と教皇の甥たちの対立は公然のものとなり、お互いに宮廷における無礼の応酬をしたほどである<sup>55</sup>。その後もバルベリーニ家とパルマ公の溝は埋まらず、1641 年 8 月に、パルマ

<sup>54</sup> 例えば印刷されたオペラ・スコアにはバルベリーニ家の蜜蜂の紋章がふんだんに飾られている。Cf. *Il Sant'Alessio* (Roma, 1634)(Yale University, Beineck Rare Books & Manuscript Library, Beineck Digital Collections, *Il Sant'Alessio*, [https://brbl-dl.library.yale.edu/vufind/Record/3440829]accessed 21 January 2020) .

<sup>55</sup> Nussdorfer, *Civic politics*, pp. 205-209.

公はフランスの支援を取り付けたこともあって、カストロに軍を集め、それに対抗して教皇が戦争を開始した。

戦争体制に入ると、ウルバヌス8世の3人の甥は役割を分担した。この非常事態において、教皇庁中枢における国家統治と血縁的結合の関係が明瞭になる。フランチェスコは、全体の統括はさることながら、軍の募集と訓練を担当した。世俗人で教会将軍の次男タッデーオは、初期から戦場に繰り出し、敵の本拠地であるパルマ公国の近く、ボローニャ付近で待機していた。三男で枢機卿のアントーニオは、教皇庁会計院を統括していたが、有事には軍隊を率いて戦場に向かうことになっていた<sup>56</sup>。実際、1642年9月17日にアントーニオはローマを出発し軍事行動を開始し、戦況に大きな影響を与えていく<sup>57</sup>。

戦争の渦中であって都市ローマの市民は、教皇から重税を課され、不満を抱いていたが、その矛先は教皇自身よりも、甥たちに向かっていた。市民たちは、バルベリーニ一族が戦争を開始した経緯を責めるのに加えて、彼らがこの戦争から巨額の利益を巻きあげているのではないかと疑っていたのである。実際に、教皇庁の聖俗両方の任務にあたることで莫大な報酬が生み出され、その額は平常期とは一線を画していたといわれる<sup>58</sup>。

1643年の春には、パルマ公を援助するため、トスカナ大公、モデナ公、ヴェネツィア共和国が連合して軍を派遣した。戦争の早期終結という教皇側の目論見は外れ、戦争の見通しは厳しいものとなっていく。教皇は、パルマ公に味方するものを破門にすると脅していたが、あるローマ市民の日記によれば、連合側は、これは教会への戦争ではなく「バルベリーニ家に対する戦争」であると宣言することで正当化していた<sup>59</sup>。

その日記からはさらに、書き手自身もバルベリーニ家への不満を強めていたことがわかる。彼によれば、上述の君主らは同家の土地には全く攻撃せず、むしろ教会の都市を標的にしてしまっている。彼らの戦争は、同家に損害を与えるよりむしろ利益を与えていると、日記では皮肉られている。というのも、日記によれば、同家は教会軍の将軍という官職を通して莫大な富を巻き上げているからである<sup>60</sup>。

1643年の11月、戦闘シーズン末の軍事情勢は均衡状態であった。そこからさらに戦争を続行しようとした教皇は、ローマ都市政府に増税を強要した。また人頭税を取るという前代未聞の行為に頼ろうとして、人々を余計に困惑させた。結局、その時は人頭税の徴収には至らず、1644年の3月に和平が結ばれ、戦争は終結を迎えたが、後に新たな税が徴収されるようになり、教皇が7月29日に亡くなるまで、ローマ市民の経済的負担は重くなるばかりであった。市民たちにとってこの戦争は、度重なる増税に加え、教会や国家の事柄であるよりもバルベリーニ家の事情に由来すると思われたために、より一層彼らの不満を強める結果となった<sup>61</sup>。

<sup>56</sup> Ibid., p. 211.

<sup>57</sup> Ibid., pp. 215-225.

<sup>58</sup> Ibid., pp. 217-218.

<sup>59</sup> “Il Gran duca di Toscana si manifestò nemico del Papa, et sono collegati insieme, Odoardo già duca di Modena, il Gran Duca di Toscana, et i Venetiani, li quali dicono, che loro fanno guerra non contro la Santa Chiesa, ma contro i Barberini”. Id. (ed. by M. Barberito) *Diario di Roma* vol. I (Roma: Editore Colombo, 1994), p. 391. 同様の例として次も参照: Ibid., pp. 393, 399. また Nussdorfer, *Civic politics*, p. 219.

<sup>60</sup> Nussdorfer, *Civic politics*, pp. 219-220.

<sup>61</sup> Ibid., pp. 226-227; Benigno, ‘Nipoti favoriti’, pp. 92-94. 歴史家ベニーニョによれば、人々はバルベリーニ家の私的利害のために臣民を犠牲にしているという状況認識に至ると、間接的に、ネポティズム批判というレトリックを通して権力批判を行ったという。

この戦争からは、近世教皇庁及び教会国家の統治におけるネポティズムの機能を改めて確認することができる。まず、カストロ戦争という非常事態において、甥3人が中心となって戦争を遂行したことが見て取れる。カルディナル・ニポーテであるフランチェスコは、その中で特に全体を管轄する存在であった。近世教皇庁において血縁を基軸とする政治様式がここに顕著に現れているといえ、その中でもフランチェスコ・バルベリーニが依然として中心であったことは明瞭である。

次に、教皇の甥たちの存在は、教皇庁の政策の失敗に対する不満の行き場として、非常事態下の人々の言説の格好的となった。甥は、教会国家を運営する要として機能していたにもかかわらず、皮肉にも統治者に不満を持った人々が彼らを攻撃するためのレトリックともなった。しかしこれは裏を返せば、教皇の甥が教皇庁において極めて重要な人物であることが十分に認識されていたということである。

カルディナル・ニポーテの「重要性」を考慮するためにもう一度整理するとすれば、非常事態においてフランチェスコ・バルベリーニは政府における中枢を担ったという点で、教皇庁という組織においても、家族という単位の中でも彼が高い位置にいたことがわかる。そしてもう一つ重要なのは、カルディナル・ニポーテの重要性が都市民衆によって明確に認識されていたことである。ただしその認識は皮肉にも、非常事態下にあつて、あからさまな攻撃の対象になることで顕著に立ち現れることになった<sup>9</sup>。

## 6. 結論

ここまでの事例を踏まえて、フランチェスコ・バルベリーニは教皇庁においてどう位置付けられるだろうか。まず確認すべきは、彼の役割について、それぞれの側面においては絶対的な重要性を論じることが難しい場合もあるということである。例えば行政制度や政策決定において國務秘書官が時には影響力を持っていたり、あるいは文化パトロネジにおいては彼の兄弟なども極めて大きい貢献をしていた。ただし従来の議論ではそれぞれの点にのみ終始しており、統合して一つの現実を読み解く試みはなされていなかった。しかしながら、本稿でみてきたように、それらの諸側面を並べてみれば、これらの多様な役割を一身に引き受けている人物は教皇庁において、やはり彼しかいないという印象を受ける。

フランチェスコは、様々なレベルで主体的な役割を果たしており、それは構造上の教皇の代替物に留まるものではなかった。手引きによれば彼は国家官僚であったと同時に、教皇庁宮廷の中での名誉分配、無数の政治的交渉など、日常的な宮廷生活のレベルで主体的役割を果たさねばならなかった。その役割は、構造的にはパトロン・クライアント関係における教皇の代替物ともいえるが、しかしカルディナル・ニポーテの主体性が不可欠であることにはかわりなかった。またヨーロッパ諸宮廷の文化競合への参加者の一人であり、その競争相手に遜色のないよう、自分の抱える芸術の水準を高めるように努めた。さらに、カストロ戦争においては彼が非常事態時の政府の統率役となっていたこともわかる。そして都市ローマの住民からも、教皇庁の政策において非常に重要な人間だとみなされていた。だからこそ、経済的圧迫が住民にのしかかると、住民の非

<sup>9</sup> バルベリーニ家以後のネポティズムの変遷、及びネポティズム廃止の議論は cf: Benigno, 'Nipoti favoriti', pp. 94-97; Menniti Ippolito, *Il tramonto*, pp. 80-126.

難の声は甥へとむけられたのである。このように、フランチェスコは現実的に様々な面で中心的役割を果たし、それは他者の眼からも認識されていた。

以上のことから、フランチェスコ・バルベリーニは、きわめて多面的かつ重要な役割を主体的にこなしていたといえる。そして彼ほど多方面に影響を与えた人間は、少なくとも教皇を置いて他にはいないと考えられる。

ではこの在り方は、カルディナル・ニポーテの歴史の中でどのように位置づけるべきか。教皇ごとの方針の違いは大きく、甥の用い方も異なるため、今後緻密に比較していく作業が必要と思われる。そのうえで、現段階での見解を述べるとすれば、フランチェスコ・バルベリーニは少なくとも17世紀前半という区分の中では他のカルディナル・ニポーテと共通した権力の在り方を呈しているように思われる。カルディナル・ニポーテの歴史の中で、17世紀以降は特に、聖省整備の進展に加え、他のヨーロッパ諸国の「寵臣宰相制」に呼応するような政治体制や文化パトロネジ戦略が、カルディナル・ニポーテを中心に展開されるからである。一方、17世紀後半に各統治機構の自立が生じ始めているという教皇庁の状況は、17世紀前半からの変化を示唆しているのではないだろうか<sup>66</sup>。

むしろ今回の考察はごく少数の事例に限られているため、この結論をさらに検証し、彼の影響力を検討するには、通時的変遷も考慮しつつ、より網羅的に彼の活動を把握することが重要である。そのうえで、教皇庁の他の有力人物との厳密な比較をすることで、教皇庁における彼の重要性について答えを出せるようになるだろう。

この主題の先にある問題は、カルディナル・ニポーテの役割の幅広さと、教皇庁内外の政治問題との関連である。カルディナル・ニポーテが教皇庁において影響力を持つ人物である場合、我々がより注意すべきは、その存在が背負う多数の要素（枢機卿、国家統治者、学芸パトロン、宮廷派閥、そしてとりわけ本稿ではそれほど触れることができなかった家門の利害）が、いかに複雑に絡み合いながら教皇庁や教会国家の政治的進展に影響を与えていったのか、ということである。

「教皇権」は、単に教会を代表する単純な一枚岩でもなければ、宮廷派閥のパトロンや家門の代表それぞれのみを担っているのでもない。むしろそれらは相互補完的に作用していたとさえいえるかもしれない。いずれにせよ近世教皇庁において、多数の要素は複雑に絡み合った一つの総体的な現実をなしているのである。そうであれば教皇庁の政治的変遷についてもまた、権力の諸要素に対する理解を統合することによって初めて、同時代的な「生きた」理解に近づくことができるだろう。

<sup>66</sup> 17世紀前半にヨーロッパで広まった「寵臣宰相制」については次を参照。フランチェスコ・ベニーニョ（著）、喜友名朝輝・竹下和亮（訳）『寵臣と大臣―バッキンガムの事例』（『寵臣と反乱者―バロック政治の諸様式』ブルゾーニ、2011）『ICU比較文化』53号、2021年、203-233頁。